

尊き者

沈黙して正法に耳を傾ける心、世にこれほど尊い心はあり得ない。

お浄土から、み仏のみ心臓こころから流れ出る、尊いみ法をそのまま領解する心は、み法そのまゝの尊い心である。それ故にその心までみ仏の廻向である。

しかし、み仏の心から流れ出る尊いみ法すら、それを素直に聞かない邪見な魂が内にひそむ。み仏の信じられない人は、その心の方を正しいと思う。それ故に教えをね返して、時には誹謗して平気である。

大聖世尊を、七高僧を、親鸞聖人を、その他の尊い人を生み出したのが、み法の流れであった。そして、その正法に反逆する心が、世の暗いあらゆるものを生み出した力であった。

静かにみ法に耳を傾けていると、いくらでも、内には悪い醜いものが掘り出される。一物として、清いものは、美しいものは見出されない。そしてその底にもものすごい流れがある。

み仏の心は真心である。その真心故に、醜い自分に触れることに堪え得るのである。み仏の心を領解し得ない者は、ゴマ化し、逃げてゆくことをのみ考える。懺悔とは、真心徹到することによつて、悪の自己にまともに向うことの出来た人である。

かかる人には、如来の真心故に、歓喜と、力と、明るさと、温かさを恵まれる。世に念仏になりきる人は極めて少い。それは今に限ったことではない。

しかし念仏になりきつた人は、いつの世でも尊い。尊い人に会いたい。お金持にも、強い人にも、賢い人にも、お会いしたいとは思わないが、尊い人に会いたい。しかしこの私の衷心の願いはかなえられた。

私は、尊い人に会いたいと、願い求める。しかし完全な人に会いたいと言うのではない。

世間の多くの人は、自分で考えた完全な人を求めている。

しかし、松の大木は大抵、不完全である。しかしその不完全なまゝに、美しい調和を持つている。

私の書いた字を見ると、どんな字を見てもまだ若い。

時々老大家の字を見るとたまらなくなる。しかし、あせつて、六十、七十の老大家の字を真似てはならない。一尺にも足らない盆栽の松は大木ではない。自分に盆栽になれと勧めることは、自分を殺すことである。

私はただ尊いものにうたれたくない。生れたばかりの男の子に、それがどれだけ丈夫だとて、走り競争に出よ、とは言わない。

小学校に通う子に、それがどれだけ秀才でも、英語を知らぬとて叱りはしない。自分がどれだけ念仏道に深く入ったとて、後から来る者に、そのまゝを求めてはならない。

み法の座にまぎれこんだ人をさへ、讃めてたたえて喜ぶ人の周囲にだけ、やがて念仏の華は咲きにほふ。

念仏道の深さを知らぬ者に無理な叱責がつきまとう。

宗教家は、普通の念仏者よりも汚いものがつきまといやすい。体面や、名利や、優越感や、制裁欲や、そうしたものが正法を正法として受け取らない。

それだけ悪人である。真剣に三宝に帰依すべきであり、忠実に自己を領解すべきである。

いわゆる、お同行は、それだけ本気にならないでも、難しいことを聞かないでもと、み法に底を入れやすい。もしこの我を打ちくだかれたら、ほんとうに尊い人になるだろう。

多くの有難い人と共にあれば有難いが、一人でおればなんともない間は、決して油断してはならない。一人いて念仏申され、一人いて憶念の心常なるに至って、初めて念仏はその人のものとなったのである。

親鸞聖人は、念仏の功をば、これを如来に返しきって、そこに純粹他力を感じられた。念仏は自己の上から一切の徳や善を振り捨てて、自力作善の心なくなった人のみ、無根の信、如来廻向の大善として領解せられる。

一徳一善でも、これを己の上に肯定すれば、すぐに苦の種となり、曇りとなり、障碍となる。常に念仏と共に廃捨すべきである。

浄土への白道は、恭敬の心の上のみ開かれる。恭敬とは己をへり下り、向うの徳を上げて、頭を下げることである。純なる心である。

頭の高さは、心臓の濁れに比例する。み仏の生きたもう者のみ、頭を下げる。如来は恭敬の心に光りたもう。尊き人とは、恭敬して念仏に生きる人である。